都道府県別賞一等

縁起でもない話と、現実の数字

長野県　茅野市立東部中学校　二学年

吉澤　敦翔

生命保険なんて、中学生の自分には関係のない話だと思っていた。テレビのCMで「万が一の備えに」と言われても、病気や死ぬときの話なんて縁起でもないし、正直に言えば『そんな毎月お金を払うくらいなら、今のお小遣いを増やしてほしい。』とさえ思っていた。

そんな私が、生命保険について現実味を持って考えるようになったのは、去年の冬に友達の家で起きた出来事がきっかけだった。友達のお父さんが、仕事帰りに事故に遭って入院してしまったのだ。命に別状はなかったものの、手術やリハビリで数カ月も仕事を休まなければならなくなった。

友達は「お父さん、入院しちゃってさ。」と無理して笑っていたけれど、部活の遠征費の話になったとき、少し曇った顔をした。そのとき私は、ハッとした。誰かが病気やケガをするということは、ただ体が痛くてかわいそう、という問題だけではない。病院にお金を払わなければいけないし、働けない間は収入が減ってしまう。つまり、急に現実的な〝お金のピンチ〟がやってくるということなのだ。

気になって家で少し調べてみたら、入院や手術には何万、何十万というお金がかかることを知った。もしもっと重い病気だったら、何百万、何千万という単位になることもあるらしい。中学生の私には想像もつかない金額だ。もし我が家でそんなことが起きたら、私の塾の費用や、楽しみにしている高校や大学の進学費用はどうなってしまうのだろう。そう考えたら、急に背筋が寒くなった。

でも、友達のお父さんはその後、無事に退院して、友達も変わらずに部活を続けられている。後から聞いた話では、入っていた生命保険からお金が出たため、医療費や生活費は何とかなったのだそうだ。

そのとき初めて、私は親が毎月払っている生命保険の本当の意味を理解した。それは、ただの縁起でもない契約ではなく、『もしものことがあっても、子どもの生活や未来だけは絶対に守る。』という、親のリアルな危機管理であり、必死の防衛策だったのだ。

そう考えると、私が今、お金の心配をせずに学校へ通い、友達と遊び、将来の夢を呑気に語れていること自体が、親が用意してくれた「生命保険」という目に見えない安心の枠組みに守られているからなのだと気づかされる。

綺麗事ではなく、生きていくにはお金がかかる。そして、人生にはどうしても

予期せぬトラブルが起こる。生命保険は、そんな厳しい現実から家族を守るための、大人の知恵なのだと思う。

私はまだ中学生で、親に守られている側の存在だ。だからこそ、親が作ってくれているこの安心に甘えるだけでなく、まずは自分の体や健康を大切にして、無茶なケガをしないように気をつけたい。そして将来、私が大人になって誰かを守る立場になったときには、今の親と同じように、現実から目を背けずにしっかりとした備えができる大人になりたいと思う。